愛知県気候変動適応センターだより（2023年10月号）

愛知県気候変動適応センターでは、気候変動適応への理解と取り組みを促進するため、市町村職員等を対象としたセミナーを実施しています。9月5日に開催したセミナーでは、国立感染症研究所　安全実験管理部／昆虫医科学部の沢辺（さわべ）　京子（きょうこ）さんに「気候変動に影響される節足動物媒介感染症」についてご講演いただきましたので、内容の一部を紹介します。

〇デング熱を媒介する蚊の国内分布域が拡大

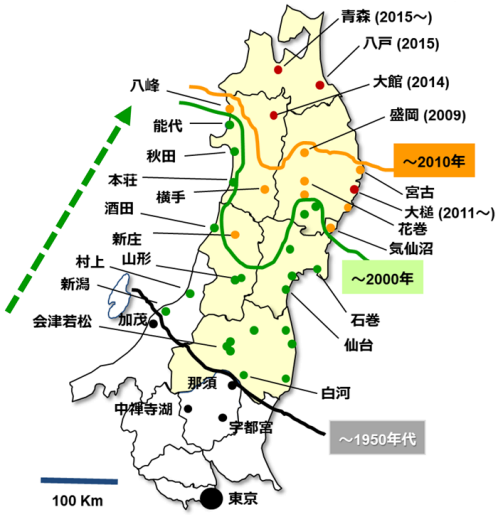
蚊が媒介する感染症には、日本脳炎、マラリア等があります。中でも世界で年間約4億人が感染するデング熱は、国内でも年間数百人の患者が報告され、また、国内で承認されたワクチンはありません。デング熱は、ヒトスジシマカ（通称ヤブ蚊）やネッタイシマカにより媒介されることが知られています。

ヒトスジシマカは、日本における代表的な蚊で、年平均気温 11℃以上の地域に定着するといわれており、国立感染症研究所の調査によると、温暖化の進行により、ヒトスジシマカの国内生息域は北上し、分布域が拡大していることが明らかになっています。1950年代には関東北部が生息域の北限であったところ、2000年代には東北中部に達し、現在では青森県に達しています。また、既に分布域となっている愛知県では、温暖化の進行により、ヒトスジシマカの活動が長期化すると考えられます。

また、ネッタイシマカについても、年間で最も気温の低い1月の平均気温が 10℃以上の地域で定着が可能と考えられ、温暖化の進行により 2100 年には九州から関東地方の太平洋沿岸地域でも分布が可能になると予測されています。

温暖化の進行により、蚊の生息域が拡大したり、活動が長期化したりすれば、デング熱などの蚊媒介感染症のリスクが高まる可能性があります。

こうしたリスクを減らすため、蚊の幼虫の生息場所となっている水たまりや成虫の潜む草むらを減らすことが考えられ、具体的には住宅周辺に散乱している雨水が溜まった容器等の処分・整頓、逆さにして水を無くすこと、下草を刈ることなどが有効とされています。



（　）内は幼虫が初めて確認された年。
●栃木県：米進駐軍および宇都宮大の調査による
●新潟県：新潟大の調査による
● ● ●：国立感染症研究所昆虫医科学部の調査による

出典：国立感染症研究所
病原微生物検出情報（IASR）2020, 41: 92-93

ヒトスジシマカの生息域の北限の推移

環境調査センター　企画情報部
愛知県気候変動適応センター
電話 052-910-5489(ダイヤルイン)

適応とは、気候変動の影響に備えること。

愛知県気候変動適応センターだよりのバックナンバーはこちら
https://www.pref.aichi.jp/site/ailccac/tekiou-dayori.html